

## 今日の説教のポイント <ローマの信徒への手紙8章18-25節>

### ①命の不安と電力の不安を同じ天秤にかけてはならない

最近の福島原発事故の番組を見ていて、二つの不安が取り上げられて論じられているように思います。一つは放射能の影響が体に与える不安、もう一つは原発を止めた場合の電力不足に対する不安です。違和感を覚えます。どちらも確かに不安が生じることです。しかし、質というか、重さのレベルが違う二つの不安です。原発は、その開始以来、放射能を浴びて点検や修理に当たる人々の存在なしにはあり得ない技術です。電力確保の方法は他に幾らでもあります。なぜ原発なのでしょう？ 他の方法は高くつき、技術的に難しい問題を抱えているから？ しかし、人の体や命を犠牲にしながら成り立つ原発にこれからも頼り続けていたいいのでしょうか？ 命の不安と電力の不安を同じ天秤にかけて比べてはならないと思います。

### ②被造物のうめきを利用してはならない

原子力（核分裂の際に放出されるエネルギー）利用は、突き詰めて言えば、「自然界に存在している原子に、人間が不自然な仕方でも無理やり手を加えて不安定な状態にし、それがまた安定な原子に変わろうとする時に出すエネルギーを利用しようとするわざ」なのです。ローマの信徒への手紙8章には、「被造物のうめき」という表現が出て来ますが、私には原子力の利用は被造物のうめき、涙を人間が利用しているように思えてならないのです。それは、人間が他の被造物に対して為すことを神様が許された限度を越えているのではないのでしょうか？ 被造物のうめき利用が膨大なエネルギーを生むことを人間は発見しました。しかし、それは思ってもいなかった恐ろしい副作用、放射能も伴っていたのです。扱うに非常に困難危険、それは神様からの示しだと思います、「ここで止めよ」という。

### ③災いを禍で終わらせず、もっと大きな幸い、喜びにつなげよう

今回の事故はなお予断を許さず、危険な状態が続いています。このような中で考えるべきは、原爆体験をした国が世界の先頭を行く原発国であり続けたこと、その中で今回の原発事故を経験したこと、その意味を深く考えることではないのでしょうか。もしそのことから、神様と世界の人々に喜ばれるような方向にこの国が向かって行けたなら、苦しみと悲しみは喜びへと変えられて行くことでしょう。神様にも、また天に召された人々にも喜んでもらえる道を選びたいと思います。